

ラテールにようこそ！



aqua-rium



なんでこんなことになってんだ。

俺はさっきまでゲームやってたはずなんだ。

しかし、俺はベロスという町を全力疾走している。

目的地はこの町にあるという戦闘用品店。

一刻も早く辿り着かなければならない。

なぜなら、今の俺の格好がパンツ一丁だから！

雨、雨、雨…

3日間降り続いてる雨のせいで、何もやる事がなく退屈だ…

リビングでだらけていた俺に、下の妹ヒナタがおかしな事をいい出す。

「ヒロ兄…暇だからアルゼンチンバックブリーカーやっていい？」

この時点の俺はアルゼンチンバックブリーカーがプロレスの技という程度で、どんな技なのかは知らなかったが、暇つぶしにはなるだろうと思いOKした。

「いいぞ。やってみろ。」

「お！じゃあ、ソファに横になってあっち向いて。んで、ちょっと腰浮かせて。」

嬉しそうに指示を出すヒナタに従い、言われたようにする。

ヒナタは、浮かした腰とソファの間に頭を突っ込み、俺の太股と顔を掴む。

「ほいじゃ、やるね〜。」

ヒナタは、その状態で立ち上がろうとするが、うまくいかず、俺はヒナタの背中を転がるようにして床に落ちた。

「ぐっ…」

落ちた衝撃で俺は気付いたね。アルゼンチンバックブリーカーってのは人間を重量挙げみたいに持ち上げて、わっしょい、わっしょいする技だ。ヒナタに出来る訳がない。

「ありゃ…失敗か…だがしかーし！アルゼンチンバックブリーカー失敗か〜ら〜の〜…」

ヒナタは立ち上がろうとする俺の脚を掴み技をかける。

「さそり固めー！」

「ぐうあ！」

なんか恐ろしいほどうまく決まってる。

「降参する？降参する？」

「ぐう降参しないっ！」

兄のプライドにかけて降参するわけにはいかない。

もがもがと動いていると俺のポケットに入っていた携帯電話が鳴り出す。

電話の音に気をとられたのか、ヒナタが少し手を緩めたのでその隙に逃げ出し、何事もなかったように電話に出る。

「もしもしっ！」

「もっしも〜し？ヒロ？」

友達のユウジからだ。ナイスタイミングと心の中で親指を立てる。

「おう。どした？」

「あのさ、今ラテールっていうネットゲやってるんだけど、お前もやらね？」

「ん〜？面白い？」

「おう。面白いぞ。お前んとこパソコンいっぱいあるんだから、妹ちゃんも一緒にな？な？」

ユウジの言う通りうちにはパソコンが沢山ある。親父がパソコン好きで毎年1台は買い変えてるのでそのお下がりが大量にあるのだ。

「じゃあ、暇だしやってみるかな。」

ぶっちゃけ、ヒナタのプロレスに付き合ったら身体が持たない。

「マジで！？それじゃ、ミツキちゃんも……」

その時、ドーンという轟音と同時に部屋の電気が一瞬消え、すぐに点く。雷だ。

「さっきの雷、結構近かったな？」

少し興奮気味にユウジに話しかけたが、すでに電話は切れていた。

「おおおう！サンダー！近かったねー！？」

ヒナタは、カーテンを開けて空を見上げながら、両手を広げぴよんぴよんとジャンプ。

「雷落ちてこいやー！」

と、叫びながら雷乞いの儀式？をはじめた。

ダッダッダッダッ！

音は、階段を駆け下りて、こちらに向かって走ってくる。

ガチャリとリビングの扉を開けて入ってきたのは上の妹ミツキだ。

ミツキは部屋に入るなり、こちらに近付いてきて、俺のシャツの裾を掴む。

「そういや、お前、昔から雷恐怖症だったな？」

瞳いっぱい涙溜めて今にも泣きそうだ。

ミツキはコクコクと頷く、と同時に、

「どっか〜ん！」

突然ヒナタが大声で叫ぶ。

ミツキは「ひゃ」と小さな声を発して俺に抱きつく。

「ヒナタ！そういうのやめろ！」

「あはは〜ごめ〜ん。」

「さっきのヒナタだから、大丈夫だから、な。」

ミツキの頭をぼむぼむ撫でてやると、ミツキはコクリと頷いて俺から離れた。

「あ、そだ。さっきの電話誰からだったの？女か！」

ヒナタが変な勘ぐりを入れてくる。

「ちげーよ。ユウジから。」

「あ〜あの変態ユウジか。」

「ちげーよ。あいつは勇者だ。」

ユウジは、女子からは変態と蔑まれ、男子からは勇者と崇められる数々の武勇伝をもっている男だ。その武勇伝を一つ一つ熱く語って行きたいところだが、ここでは割愛。

「そういや、ユウジがラテールってネトゲが面白いって言ってたから、一緒にやろうぜ。」

「あ、それ、やってる。楽しいよ。」

さっきまで泣きそうだったミツキが嬉しそうな顔をしている。

「お、それじゃ色々教えてくれよ。」

ミツキはコクリと頷く。

「ヒナタはどうする？」

「暇だし、やろうかな。」

「おっし、じゃあノートパソコン持ってこよう。」

それぞれのノートパソコンをリビングに持ち寄って、ミツキのパソコンを真ん中に置きそれを挟むように、俺とヒナタのパソコンを横に並べる。

ミツキの指示に従いながら、IDを取りクライアントのダウンロードを開始。

「インストール終わるまで、やる事ないから公式サイト攻略ガイドを見て操作方法覚えるといいよ。」とか、

「キャラの名前は、他の人が使っていると同じの使えないから、色々考えてた方がいいよ。名前の後に記号とか数字入れたりするのもいいよ。」

などミツキ先生からアドバイスをいくつか頂いた。

ヒナタは、こういう事が得意ではないので、ほとんどミツキがやっているようだ。

ダウンロードが終了したので、インストールを開始させて、名前を考える。

野菜の名前に数字つければいいのか。

インストールも完了して、いよいよゲーム開始かと思いきや、アップデートが開始される。

「結構時間掛かるもんなんだな……」

「はじめだけだよ。」

アップデートも終わり、IDとパスワードを打ち込みゲームスタートをクリックするとワールド選択画面が出る。

「ワールドが違うと一緒に遊べないから、同じワールドとチャンネルにするよ。」

この辺はミツキに言われたとおりにクリックしていき、キャラ作成画面に移る。

ここでは、キャラの名前、性別、職業、見た目を決める。

色々悩んだ結果、俺のキャラは完成した。オカッパぶたネコのファイターだ。

ヒナタはマジシャンを作り、ミツキも新しくレンジャーを作ったようだ。

こうして出来た白いシャツとパンツを着たキャラをダブルクリックするとプロローグが始まる。

俺はそのプロローグを見ていたが、ヒナタのやつはプロローグをSKIP。

「おおい！プロローグは重要だろ？」

「いや～、なんか読むのめんどそうだったから……」

ヒナタは、早々にチュートリアルを始めてしまう。

ヒナタに置いていかれるのは癪なので、俺もプロローグをSKIP。

イリスという女の子が魔王と戦ってたみたいだけど、結局戦いがどうなったかわからなかった。

プロローグをSKIPさせるとアビオレッドによるチュートリアルが始まった。

ここでは、クエストの受け方や操作方法の説明があり、防具一式を貰いレベルが1つ上がった。

チュートリアルを終え、最初の町ベロスに飛ばされる。

キャラを動かすとすぐに、アンネというNPCに話しかけられるが、これまたヒナタが連続クリックで話をすっとばし、杖に乗って動きだしたため、俺も連続クリックで話をすっとばしヒナタを追いかける。

「おい！ちょっと待てよ。」

「うふふふ～捕まえてごらんなさ～い。」

ミツキの方はというと、初めてでもないのにプロローグをじっくり最後まで見て、まだチュートリアルをやっていた。

ミツキの画面を見ていたせいでヒナタのキャラを見失う。

「あれ？ヒナタどこいった？」

ヒナタの画面を見ると洞窟のような場所にいる。

「お？それどこだよ？」

「ん？井戸っぽいの入ってみた。おっ！虫発見。覚悟せいやー！」

「あっ、そのマップ敵強いからまだ無理だよ。」

ようやくチュートリアルを終わらせたミツキが声を掛けるが時既に遅し。

「だー！死んだー！」

「ぶっ、死ぬの早いな。そういや、攻略ガイドに井戸は危険って書いてたな。」

「はじめは、町の一番右のポータル入ってプリリンを倒すのがいいよ。」

ミツキは、俺とヒナタをパーティーに入れて走りだす。

俺とヒナタは、それを追いかけた。

次のマップに進むと、そこには可愛い生き物がピョコピョコ跳ねていた。

「お、プリンかわいいな。」

「かわいいよね。わたしプリン大好き。お金がいるけど、ペットにも出来るんだよ。」

「ほー。」

そんな話をミツキとしていると、ヒナタが容赦なくプリリンを杖でベチベチと叩き倒す。

「ふっ雑魚があ！」

ヒナタにならない、俺とミツキもプリリンを倒していくとすぐにレベルアップ。

「3人いるから、もっと先に進んでも大丈夫かも。」

というミツキの提案で次のマップに進む。

「はう、虫がいる。」

先ほど虫にやられたばかりなのでびびるヒナタ。

「ビートルは、弱いから大丈夫。」

と、ミツキはあっさりとビートルを倒す。

「名前が黄色い敵は自分のレベルに合ってる敵だから戦い易いけど、名前が赤い敵は自分よりレベルが高い敵だから見つけたら逃げた方がいいよ。」

「なるほど。」

ヒナタと一緒に感心する。

その時、突然、窓の外がピカッと光ると同時にドーンという轟音に思わず目をつむる。音のせいなのか地面が揺れているような感覚もあった。かなり近くに雷が落ちたみたいだ、いや、うちに直撃したのかもしれない。

部屋にスタングレネードを投げ込まれたらこんな感じなのかもなあ…などと考えながら恐る恐る目を開くと、そこには壁も天井も床もパソコンもなくなっていた。

振っていたはずの雨も止んでおり、俺達3人は石畳の道に座っていた。

「雷すごかったな？」

今の状況は全く掴めていないが、とりあえず妹2人に話を振ってみる。

「いやー。雷、直撃で家吹っ飛んじやったみたいだねえ。びっくりだあ。」

「俺達だけ残して家が吹っ飛ぶってことはないだろ？」

ツッコミがてら、ヒナタの方を見ると、妹2人は下着姿だった…

「おおい！なんでお前ら、下着姿なってるの？」

「おおう！？ほんとだ。さっきの雷で吹っ飛んだんかな？ってかヒロ兄もシャツにパンツじやん。」

「おおう。マジだ…」

しかも、ミツキが俺のシャツをガッチリ掴んで伸びちゃってるし…

「あ〜わかった。バトルアニメとかでよくある攻撃受けると服だけが綺麗に破ける現象だ！」

「んなアホな…」

…そういえば、ミツキの反応がない。

「ミツキ！大丈夫か？」

ミツキはコクコクと頷く。生きてはいるようだ。

ヒナタとの会話で落ち着きを取り戻し、周りにも目をやり現状を確認してみる。

すると、そこにはどこかで見た記憶のある女の方がこちらに向かってくるのを見つけた。

「こんにちはは冒険家さん、初めてお会いする方ですね。わたしはアンネといいます。ベロスに来るのは初めてですか？」

「アンネ…？ベロス…？なんか聞いた事あるな…」

「なるほど…初めてのようですね。それでは説明をしましょう。」

一呼吸置いてアンネは説明を始める。

「おそらくなのですが…ここはあなた方がいた世界とは別の世界です。ここベロスには言い伝えがあります。何かの力によって、この世界に呼ばれて来る異世界の人間が存在すると…わたし達はその方達を冒険家と呼び、その方達は、この世界のことをラテールワールドと呼んでいます。」

「ラテール！？って今までやってたゲームじゃないか。アンネもベロスもそこで見たんだよ。ヒナタも見ただろ？」

「…そうだったっけ？」

「ああ…お前は、話を全部スキップしたから記憶にないんだよ。」

「なんとなく理解していただけたようですね。それでは、お名前を教えてくださいませんか？」

「俺はヒロで、こっちのがヒナタで、こっちの放心状態になってるのがミツキだ。」

「わかりました。ヒロさんに、ヒナタさんに、ミツキさんですね。」

アンネは俺達の名前を何かに記入している。

「これでよしっと。それでは、皆さん、その格好ではなんなので服を差し上げます。ヒナタさんとミツキさんはこちらのわたしの家へ。ヒロさんはこの道をまっすぐいった先に戦闘用品店があるので、そこでバルトというおじさんに服を貰ってください。その格好で行けばすぐに察してくれると思います。」

「わかりました。では、ヒナタとミツキをお願いします。」

俺は立ち上がり、戦闘用品店に向かおうとしたが、ミツキがガッチリとシャツの裾を掴んで離さないで身動きが取れない。

「ミツキそろそろ離してくれ。」

ぶんぶんと首を横に振るミツキ。

「なんでだよ？」

掴まれた手を無理矢理開こうとするがミツキは頑なに拒む。

「もう、シャツ脱いじゃえば？」

ヒナタが笑いながら提案する。

どう頑張ってもミツキは手を離しそうにないので、ヒナタの提案を呑みシャツを脱ぐ。

すると、ミツキは俺のシャツをぐしゃぐしゃとまとめて、ぎゅっと抱きしめる。

「くそっ…町中でパンツ一丁ってのは恥ずかしいな…ってかお前らは恥ずかしくないのかよ？」

「この辺、誰もいないからわたしは平気かな。ツキ姉はまだそれどころじゃないみたいだし…あ、そだ、わたしいい言葉知ってる。パンツじゃないと思えば恥ずかしくないよ！」

「恥ずかしいわー！」

俺は戦闘用品店に向けて走りだした。

ベロスの町をパンツ一丁で全力疾走する。

そして、戦闘用品店とおぼしき建物を見つけ、勢いよく扉を開き中に駆け込む。

ほっ、と一息付くと、ここまでの道のりが走馬灯のように流れる。

露店をやっていた女の子の一人がくすくす笑ってた。もう一人いた女の子なんて手を振りながら、頑張っって一っつて応援してくれてたぜ…

などと思い返していると、突然、後から首を絞められる。

「ひっ！」

俺の首を腕でがっちり絞め、頬にナイフを当ててきた男がドスの聞いた声で問いかける。

「何モンだ。お前は？」

「ガッハッハー、離してやれケベル。そいつの格好をよく見てみる、シャツは着てないがそのパンツは間違いなく冒険家だ。」

「む？このパンツは…確かに。これはすまない事をしたな少年。冒険家に来る時はシャツとパンツのセットなんだが…お前はパンツ一丁だったからな…殴り込みかと思っちゃった。」

男は俺を解放する。

「ワシはバルト。お前さんの首を絞めたのはケベルだ。少年お前は？」

「ヒロです。アンネさんに言われて服を貰いにきました。」

「ガッハッハー、わかったぜ。ちょっと取ってくるから待っててくれ。」

バルトさんはそういうと店の奥へ消え、俺とケベルさんは二人きりになった。

気まずい時間が流れる…

一向に喋らないケベルさん。

くそっ、いきなり俺を殺そうとしたおっさんと何を話せばいいんだ…

あれやこれやと話題を考えていると、店の扉が開く。

まずい…俺まだパンツ一丁！咄嗟に商品棚の影に隠れる。

「こ～んに～ちは～。」

む？なんか聞いた事のある声。

そっと覗いてみると、入ってきたのはワンピースにマント付けたような服を着た妹達だった。

なんだお前らかよ…胸を撫で下ろす。

「いらっしゃい…」

ケベルさんは無愛想に接客をはじめめる。

「えっと…わたし達、冒険家です。アンネさんに言われて武器を貰いにきました。」

ミツキがしっかり喋ってる。ようやく雷から立ち直ったか。

「ふむ。わかった。ちょっと待ってろ。すぐに準備をする。」

そういうとケベルさんは店の奥へ消え、代わりにバルトさんが出てくる。

「ガッハッハー、おや、いらっしゃい。お～いヒロ～どこ行った～？服見つかったぞ～い？」

ひゃっほーい。ついに念願の服が手に入る。俺は商品棚の影から飛び出した。

「ぶっ、ヒロ兄まだそんな格好してんの。」「兄さん…くすっ」

妹達に笑われた。ひどく辱められた気分だ。

店の奥から戻ってきたケベルさんから、ミツキは弓を手渡され、ヒナタは杖と小石のようなもの

を手渡さる。

俺はバルトさんに貰った防具一式を装備し、ケベルさんに両手剣を投げつけられた。

俺達は、バルトさんとケベルさんにお礼を言う。

「ガッハッハー、ワシ達、というかこの町の者達は、エリアスのラジャータ王から冒険家をサポートするように言いつかっておるだけじゃ。その装備の代金はエリアス王宮から貰っておる。礼をするならラジャータ王にするんじゃな。ガッハッハー。」

こうして、装備の整った俺達はとりあえずエリアスに向かう事にする。

ベロスの町を出るとそこにはプリリン達がぴよこぴよこと跳ね回っていた。

「ゲームと一緒にだな。」

つぶらな瞳でぴよこぴよこと近付いてきたかと思うとぴよこぴよこと離れていくプリリン。

「うわぁ、本物のプリリンかわいいー。」

ミツキは、目をキラキラさせながらプリリンに近寄っていく。

「ゲームとは比べ物にならないくらいかわいいね。こんな可愛い子たちがモンスターなわけがない。」

ヒナタもミツキの後を追いかけて、プリリンを間近で観察する。

「こいつらはなんの危険もなさそうだな。」

しかし、ミツキが、

「プリリンたんは、かわいいねえ。」

と、プリリンを撫でた瞬間、状況は一変した。

撫でられたプリリンが、ミツキに対して体当たりをしたのだ。ミツキは尻餅をつきながら、

「ふふっ、いたずらっ子。」

と嬉しそうにする。

だが、今度は他のプリリンが体当たりしてきて、ミツキは地面に押し倒される。

「見て。この子達じゃれてきちゃってかわいい。仲良しになったよ。」

そう言って笑顔で立ち上がろうとするミツキに、これまた他のプリリンが2体同時に体当たり。

「あふう。」

プリリン達はミツキが見えなくなるほど集まってきて、ぴよこぴよことミツキに体当たりを繰り返す。

「ヒロ兄！なんかすごくやばい！」

「おう！」

俺とヒナタは、ミツキ救出に走る。

「くそっ、こんなかわいいやつらに攻撃なんてできねえ。」

「ヒロ兄、ツキ姉を引っ張りだして逃げよう！」

俺達は、群がるプリリンの隙間から、ミツキを引きずり出して、ベロスまで逃げ戻った。

この世界は思った以上に危険だ。

「プリリン怖いよ…プリリン怖いよ…」

ミツキに新たなトラウマが出来てしまった。

「ツキ姉…大丈夫…？」

コクコクと頷くミツキだが、これは大丈夫そうではない。

ミツキが落ちてから、プリリン地帯に入ってみたものの、ミツキは恐怖に怯え先に進むことができなかった。

そこで、俺はミツキをおんぶして先に進むことにする。

「ミツキはプリリン見ないように目を瞑っとけ。」

「うん。」

「ヒナタ、プリリンに触れると集まってくるみたいだから、慎重にいくぞ。」

「了解！」

ヒナタに先を歩いて貰い、俺はプリリンを蹴飛ばさないように慎重に付いて行く。

しばらく歩くとプリリンの姿は少なくなっていく、代わりに大きな虫ビートルが姿を現し出す。

「もう、プリリン見なくなったね。代わりに、わたしの宿敵、虫がいっぱいだ。」

「そうだな。もう大丈夫かもな。」

「あ、ヒロ兄！あれ見て。なんか光ってる塔があるよ！」

「なんだあれ？とりあえずあそこまで行ってみるか。」

光る塔まで辿り着いた俺達は、まずミツキに声かける。

「ミツキ、もう目を開けて大丈夫だぞ。やつらはいない。」

コクリと頷いて、そおっと目を開けて辺りを見回すミツキ。

「あっ！これイリスの石塔。」

ミツキは俺から飛び降りて石塔に触れる。

すると、石塔の中から、プロローグで見た女の子イリスが半透明な姿で現れ俺達に語りかける。

「ここは山林地帯です。はじめての冒険にでかけた私とムーウェンは、ここで初めてのモンスターと出会いました。ベロスから旅立った私たちは、旅をしている三兄弟から、エリアスがすごくぎやかな所だと聞きました。…いったいどんな人に出会えるのでしょうか。」

そういうとイリスは、すうっと消えていった。

「「…で？」」

俺とヒナタの声が重なった。

「えっと…ゲームだとかここセーブポイントなの。死んだらここに復活できるんだけど…わたし達死んだらどうなっちゃうんだろ…？」

「死んだらって試すわけにはいかないだろ…」

俺達のいるここは、ゲームの中だけどゲームじゃない。死んだら死んでしまうかもしれない。

もしかしたら、さっきのミツキも助けるのが遅れたら死んでいたかもしれない。

そう思うと俺は急に怖くなった。

「なんか怖いね…」

いつも元気なヒナタがボソリと呟く。俺と同じことを考えたのかもしれない。

「ミツキ、帰る方法とかわからないか？」

「…わからないよ…」

長い沈黙と重たい空気が俺達を包みこむ。

……

この空気を変えれる何かを言ってくれないかと期待して2人の顔を見る。

しかし、ミツキもヒナタも今にも泣きそうな顔をしていた。

何やってるんだ…

俺は兄貴なんだから、俺がこいつらに頼ってどうする。

俺がこいつらを守ってやらないと…俺がしっかりしないといけないんだよ。

「ミツキ、このゲームはどうやったらクリアできるんだ？もしかしたら、クリアすることで帰れるんじゃないか？」

「えっと、イリスを見つけたらクリアじゃないかな？」

「そうか！じゃあイリスを探して。ゲームクリアして帰ろうぜ！」

クリアしたからといって帰れる保証はどこにもないが、この重たい空気を吹き飛ばすため強く言い放つ。

そして、石塔に触れ、出てきたイリスに尋ねる。

「イリス！教えてくれ！あんたはどこにいる？俺達はどうやったら元の世界に戻れる？」

しかし、イリスは先ほどと同じセリフをいい終わると消えていった。

「あはははっ、ヒロ兄、完全に無視されてるっ。うけるっ。」

「ぐう…」

格好悪いことになってしまった。

「ふふっ、この先にも石塔あるから、先に進んでいけば、もっとイリスの手掛かり見つけれよ。」

「そうだよなっ！？よし！慎重に進んでみようぜ。」

「あ、でも、この先もっと敵が強くなっていくからレベル上げをした方がいいと思う。レベルって概念があるのかは、わからないけど…」

「それもそうだな…この辺の虫を何匹か倒してみるか。」

「「おー！」」

ミツキとヒナタが元気よく答える。いつも通りの空気に戻ったことに、俺はほっとした。

「ビートルの強さが分からないからな。1匹で行動しているビートルを見つけて、3人同時でタコ殴りにするぞ。倒せそうになかったら逃げるからな。」

「「了解！」」

一斉に襲い掛かり無理そうなら逃げるというチキンな作戦を立て、俺達は木の後ろに隠れる。そして、ビートルが1匹でこちらに来るのを待つ。

少しすると、ビートルがノコノコと向かって来たので、一斉に飛びだし、攻撃を開始する。ミツキは矢を射り、俺とヒナタは剣と杖で殴る。

すると、ビートルはすぐにパカッという音を立てながらバラバラになり、すうっと消えていった。

「虫、よわっ。」

ヒナタが思わず声に出す。

「ちょっとこの作戦はあげさ過ぎだったな。」

「うん。ちょっと拍子抜け。」

この戦いで余裕のできた俺達は、大胆にビートルを狩っていく。

そして、ビートルを数匹倒すと、突然、ピコピコハンマーを持った小さな天使が目の前に現れ、俺達に話しかける。

「ボクは、レベルを司る天使アップル。レベルアップおめでと～。君達に祝福を～。」

アップルは、手にしたピコピコハンマーでヒナタの頭をぴこっと殴る。

「お～！なんか強くなったような気がする！」

続いて、ミツキの頭をぴこっ。

「ほんとだ！強くなったような気がする！」

そして最後に、俺の頭を柄の部分でぐさっ！

「なんでやねん！」

思わず、つっこむとアップルは「ひい」と声を出し消えてしまった。

「でも、まあ強くなったような気はするな……魔法力が7くらい……」

こうして、レベルという概念がある事が判明し、俺達はレベルを上げながらエリアスを目指す。

ビートル、ウルフ、グリーンウォーカーにワーウルフをばったばったと倒しながらレベルを7回ほど上げる。

レベルが上がった時に現れるアップルが俺に対して攻撃的な事と、グリーンウォーカーの吐き出した液体がミツキの顔面に直撃して新しいトラウマが出来た事以外は順調に進み、俺達は、2つ目のイリスの石塔に辿り着く。

ここの石塔からイリスの情報を得ることが出来るかもしれない。

「よし、触れるぞ。」

2人が頷いたのを確認して、緊張しながら石塔に触れる。

すると、イリスが現れ、俺達に語りかける。

「ここは枯れ木の森です。ここは分かれ道が多いから、地図を見ながら慎重に進んでください。

」

そういうとイリスは、すうっと消えていった。

「「…で？」」

またしても、ヒナタと声が重なってしまった。

「えっと…このマップは確か…後から追加されたマップだったから…えっと、そのストーリーと関係のない話なのかな…？」

ミツキが困り顔でフォローする。

「ツキ姉、ちょっと質問なんだけどいい？」

「ん？なに？」

「このゲームってさ、スキルとかないの？」

「あ～俺もそれ気になってた！」

「魔法少女なのに杖で殴るだけってのが悲しくなってきたんだけど。」

「えっと、ゲームだとキーボードのKボタン押したらスキルツリーが出てくるんだけど、キーボードないから…どうすればいいのかなぁ…？」

「「ふむ～」」

どうしたものかと考えていると、ヒナタが叫ぶ。

「あっ！そだ、スキルの名前を叫びながら攻撃したら勝手に出たりするんじゃない？」

「なるほど。やってみる価値はありそうだな。ミツキ、スキルの名前を教えてくれ。」

こうして、ミツキからスキルの名前を教えてもらい、ワーウルフ相手に試してみる。

「縦横無尽！…ショックウェーブ！…出ないな…」

そうだなぁ…と悩んだヒナタがひとつの提案を出す。

「喰らえっとか、いくぞっとか付けてみたら？」

「おっし、やってみるぞ。喰らえっ！縦横無尽！…いくぞおっ！ショックウェーブっ！…ダメだな…」

「じゃさ、じゃさ、今度は、我が左手に秘められし力よ、今こそその力を解き放て…とか、太陽の光をこの身に浴びて、今必殺の…とかはどうよ？」

「長いな…まぁやってみるか…」

こうして色々叫びながらやってみたが、結局スキルなど出ないままレベルが上がリ、アップルが

現れる。

そして、俺達3人をピコピコハンマーで殴る。ちなみに俺は初めてまともに殴られた。

いつもなら、すぐに消えてしまうアップルだが、今回は何やら神妙な面持ちで話しかけてきた。

「あの…これ…ほんとはレベルが2になった時に渡さないといけなかったんだけど…」

そういうとアップルは手のひらサイズの下敷きのようなものを渡してくる。

「これ、スマートウィンドウっていうんだけど、冒険家に必須のアイテムなんだ…ちょっとどっち側の面でもいいから、指でタンタンってしてみて。」

言われたとおりに指で2度叩いてみると、スマートウィンドウに様々なアイコンが表示されるがよくわからない。

色々いじっているとミツキが珍しく大きな声を出す。

「あっ！これって、もしかして、スキルとかアイテムのウィンドウ出せるの!？」

「うん…これがないと、モンスターはアイテム落とさないし、スキルも覚えられないんだ…遅くなってごめんね。」

「「な、なんだってー!」」

ようやく状況を理解した俺とヒナタの声が重なる。

「超重要アイテムじゃないか。なんで今頃なんだよ。」

俺は思わずアップルを睨む。

「ひっ、別に、あ、あんたの顔見てたら胸がドキドキしちゃって逃げ出してたとかそういう訳じゃないんだからなっ!」

そう言ってアップルは消えた。

「ツンデレかよ…」

ヒナタが呟いた。

こうして俺達はスキルを覚えた。

マジシャンは精霊石という装備の関係で、魔法は1属性というのがベストらしいが、ヒナタは4属性全ての魔法を覚えるという事件があったがここでは割愛。

俺達は、覚えたてのスキルが楽しくて仕方なく、どんどん敵を倒していきレベルを15まで上げた。

そして、ようやくエリアスに辿り着く。

「おっきい町だねえ。」

「うん。ゲームでは人がいっぱいいたよ。」

「でも、こっちの世界は、人があんまりいないみたいだな。」

エリアスの町を歩くが、ゲームでNPCだった人しかいないようだった。

俺達は、ラジャータ王に会うためエリアス王宮に向かう。

装備のお礼をしておきたいし、この国の王様ならイリスの情報を持っているかもしれない。

王宮の前にメイドさんがいたので尋ねる。

「あの、俺達、冒険家なんですけど、ラジャータ王に謁見する事はできますか？」

「え、あ、はい！少々お待ちください。」

そうするとメイドさんは王宮内に入っていった。

しばらくすると、メイドさんが戻ってきて王宮内を案内してくれる。

王宮内は、メイドさんや兵士達が、バタバタと忙しそうに走り回っていた。

「この扉の奥にラジャータ王がおられます。どうぞお入りください。」

メイドさんは扉を開き、俺達は奥へ進む。

「そなたらが、冒険家か…名はなんという？」

俺達はそれぞれ自己紹介をし、ベロスでもらった装備のお礼を言う。

すると、ラジャータ王の側に控えていた大臣が王に何やら耳うちをする。

「ふむ。礼などよい。それより、冒険家、そなたらに聞きたい事がある。トク様という男の居場所を知っておるか？」

「あ、知っています。ベヒーモスのお腹の中に住んでる変な人。」

ミツキが答える。

「ま、まことかっ！実をいうとな、先ほど我が娘シルヴァがそのトク様という男に誘拐されたのだ…あの男、護衛の兵達を一瞬で片付けシルヴァを攫って行きおった。レビさえおればこのような事態にはならなかっただろうに…おぬしら、やつの居場所を知っているなら、シルヴァを助けてきてはくれぬか？」

こういうイベントはやるしかないだろうと思い、引き受けようとするが、ミツキは俺の言葉を遮る。

「あの…トク様の居場所はわかるのですが、今のわたし達だとトク様には手も足も出ません。レベルが全然足りない…」

すると、またも大臣が王に耳うちをする。

「ふむっ！あやつがおったか！すぐに呼んでまいれ！」

大臣は小走りで部屋を出て行った。

「今、元王室騎士団長の男を呼びに行かせた。やつならば、シルヴァを助ける事など容易だろう。そなた達は、やつの道案内をしてはくれぬか？」

それならばと、ミツキはコクリと頷く。

俺達は別室に通され、そこで元王室騎士団長を待つ事になった。

「ミツキ、元王室騎士団長ってどんな人なんだ？」

「えっと、ゲームじゃそんなキャラいなかったと思う。それにシルヴァ姫が誘拐されるなんてイベントもなかったし…全部が全部ゲームと同じじゃないみたい。」

「カッコいい人だといいね。元長。」

ヒナタは思いっきり略した。

しばらくの間、元長がどんな人物なのかで盛り上がっていると、扉がノックされ一人の男が入ってきた。

「オレが元王室騎士団長のケベルだ。案内よろしく頼むぞ。むっ、お前らが案内役か。」

元長の正体は、俺を殺そうとしたおっさんだった…

ミツキの案内でエリアスの町を出て、野原地帯に入る。

入るなり、ミツキは突然しゃがみ込み、手で穴を掘りだす。

「な、なにやってんだ？」

「穴掘っていると、ベヒーモス出てくるんだよ。」

ミツキは地面をガシガシと掘っていく。

すると、突然地面が揺れる。

「みんな近くに集まって！早く！」

ミツキにいわれた通り集まると、足元の地面がパツカリ割れる。

そして、そこから出てきた大きな何かに俺達は丸呑みにされた。

細い通路の様な食道を滑り落ちて行くと広い場所に辿り着く。

「ここがベヒーモスのお腹の中。」

「なんかウニウニしてて気持ち悪いね……」

「こんなところにトク様ってやつは住んでるのか……」

「うん。一番奥にある部屋にいるはず。」

「ふむ。ならば、オレが先に行く。後ろからどちらに行けばいいか案内してくれ。」

そういうとケベルさんは腰に挿してあった2本の短剣を手に持ち、先に進みだす。

俺達はその後を付いて行く。

少し進むと、煙の塊のようなモンスターや、バイ菌のようなモンスターが現れ一斉に襲い掛かってきた。

俺も武器を構え戦おうとしたが、ケベルさんは短剣を一振りするだけで、モンスターを一瞬で消し去り、障害など何一つないかのように進んで行く。

俺達の出番は何一つなかった。

ミツキの案内で最奥に到着する。

「たぶん、この奥の部屋にトク様がいます。」

「ふむ。ならば、これを渡しておく。」

そういうとケベルさんは、ガチャガチャのカプセルを大きくしたようなものを俺達に渡す。

ヒナタはカプセルを受け取り質問する。

「なにこれ？ポケモンカプセル？」

「これは、エリアスワープカプセルだ。これを地面に叩き付けると、エリアスに一瞬でワープできる。身の危険を感じたら使え。」

俺達は頷く。

そして、奥の部屋に突入した。

部屋には、トク様と思われる男が椅子にふんぞり返り、その足元にはシルヴァ姫と思われる女の子が猿轡をされ、ロープでグルグル巻きの状態で、転がされていた。

「ぶあはははは～よくここまで辿りついたな～諸君。」

トク様が豪快に喋りだす。

この様子を見たケベルさんは小声で、

「5秒でいい。やつの気をシルヴァ姫から逸らせ。」

と指示する。

「一緒に遊んでやりたいところだがな～諸君。我輩はシルヴァ姫との結婚式の準備・・・」

その時、ミツキがトク様に向けて『バードハンティング』を放つ。

それと同時に俺とヒナタは、トク様に向かってまっすぐ突っ込んで行く。

矢はトク様を目掛けて一直線に飛ぶが、トク様に当たる前に見えない壁に弾かれる。

「おい、女ぁ！、我輩はまだ喋っていたのだぞ？」

トク様の側まで接近した俺は軽く飛び上がり、『ショックウェーブ』をトク様に叩き付け、ヒナタは地の魔法『地龍牙』で援護する。

しかし、俺達の攻撃は、またも見えない壁に弾かれる。

俺は、その衝撃で吹っ飛び、後ろにいたヒナタを巻き込み一緒に倒れた。

それと同時に女の子の叫ぶ声が聞こえる。

「ケベルう！！助かったのじゃー！」

ケベルさんは、いつの間にかシルヴァ姫を救出していた。

「貴様らぁ！本気で我輩を怒らせたいようだな！」

そういうとトク様は椅子の手すりを何やら操作する。

すると、トク様の足元から大きな円盤状の機械がせり上がり浮遊する。

「まずは貴様らからだ！」

円盤の下部にはビーム砲の様なものが取り付けてあり、そのビーム砲が、まだ立ち上がれていない俺とヒナタに狙いを定める。

ミツキは泣きそうな顔で、円盤にむけて何度も矢を射るが見えない壁によって全て弾かれている。

これはヤバイ・・・な・・・

その時、「秘技化刀」という言葉とともに、上空に現れたケベルさんが両手に持った2本短剣を円盤に叩き付ける。

すると、円盤は見えない壁もろとも三枚に下ろされる。

さらに、ケベルさんは、円盤から飛び降りたトク様を拳で殴り倒し、スッと消える。

そして、シルヴァ姫の前に現れ、

「さぁ、シルヴァ姫、エリアスに戻りましょう。」

と、エリアスワープカプセルを地面に叩きつけシルヴァ姫と共に消える。

.....

「「ケベルさんかけー！！」」」

ワープカプセルで、エリアスに戻った俺達は、まず王宮に向かいシルヴァ姫が無事戻った事を確認し、ラジャータ王にベヒーモスのお腹の中での事を報告した。

俺達は何も出来なかったのにも関わらず、ラジャータ王は、褒美としてお金や装備をたくさんくれた。

王宮を出た俺達3人は、今回のことを話しながら歩いていると、どこからか俺の名前を呼ぶ声が聞こえてきた。

「おーい！ヒーロー！」

声のする方を向くと遠くから俺をラテールに誘ったユウジが手を振りながら走ってくるのが見えた。

「えっ！？おっ！？まじ！ユウジか！！」

「おう！そうだ！オレオレ！こんなところで会えるなんて思いもしなかったぜー！」

ユウジは近寄ってきてスピードを落とさず俺に抱き付こうとしたので、俺はさっと横に避ける。

するとユウジは、俺の後方にあった壁に勢いよく激突し、ずるりと地面に倒れる。

「はははっ、わりいわりい大丈夫かよ？」

声を掛けるが、ユウジは全く動かない。

「おい！ユウジ！冗談だろ？」

身体を揺すってみるが全く動かないまま、ユウジの身体は、すうっと消えてしまった。

「おい！？まじかよ…折角会えたのに…こんな事で死んじゃうなんて…ユウジー！」

思わず地面を何度も叩きつける。

「ヒロ兄…」 「兄さん…」

妹達は俺の肩を抱き、慰めてくれる。

「死んだら、俺達も消えちゃうんだな…でもな、俺は、お兄ちゃんはな、お前達だけは絶対守るからあ！」

涙がとめどなく溢れる。

しかし、なぜだかユウジの声がまた後ろから聞こえてくる…

「ヒーロー！すまんすま〜ん。HP削れた状態で壁突っ込んだから死んじゃったわ〜。ははは〜。

」

「ユ、ユウジ！お前死んだんじゃ…？」

「えっ、いやまあ死んだけど、この世界だとすぐ生き返れるだろ？」

「「マジで!？」」」

再会したユウジに色々質問していくと、とんでもない情報を耳にすることになる。

「帰り方？そんなの、このスマートウィンドウの『ゲーム終了』のどこ押せばすぐ帰れるだろ。

」

「なんだってー！」

こうして俺達は元の世界に戻った。

ラテールワールドから持ちかえれたのは、スマートウィンドウただひとつ。  
そのスマートウィンドウに触れると、そこには『ゲームスタート』の文字が浮かび上がる。  
どうやら、ラテールワールドはいつでも俺達を待っているみたいだ。